

研究課題	TNQ サイクルを取り入れた授業デザイン
副題	～うまくいなくてもいい おもいきって やってみよう～
キーワード	探究 教科等横断的な学習 カリキュラム・マネジメント
学校/団体名	公立池田市立緑丘小学校
所在地	〒563-0026 大阪府池田市緑丘 2-5-12
ホームページ	https://www11.schoolweb.ne.jp/swas/index.php?id=2710034

1. 研究の背景

2021年度に実施された学力調査「すくすくウォッチ（5・6年生）」¹⁾のアンケート項目「失敗を恐れないで挑戦しているか」において、大阪府平均と比べて肯定的な割合が低い傾向にあった。このような現状を踏まえると「うまくいなくてもいい おもいきって やってみよう」を学校文化として根付かせることが喫緊の課題であると考えた。

上記の課題解決の手段として、本校では独自の TNQ（探究）サイクルを取り入れた授業デザインを推進した。TNQ サイクルとは、子どもが問い（Question）をもち、思考（Thought）を深め、協働的（Network）に問題解決するという探究過程である。TNQ サイクルを通じた問題解決に拠って、子どもが達成感を積み重ねることで「うまくいなくてもいい おもいきって やってみよう」と思える子どもを育てることができるのではないかと考えた。

『学習指導要領解説特別活動編』において、学校行事は「各教科や道徳科，外国語活動，総合的な学習の時間などの指導との関連を図ること」²⁾が重要とされる。つまり、特別活動「学校行事」と教科等を関連付けることが求められている。そこで、本校では TNQ サイクルを取り入れた特別活動「体育発表会」（以下、体育発表会と表記する。）と教科等を関連付けた教科等横断的な学習を対象とした研究を行い、めざす子どもの像の実現を図ってきた。実践研究を進めるにあたって、ICT 機器を活用することによって、子どもの探究が促されることが明らかとなってきた。そこで、子どもの探究過程における ICT 機器の活用法を、TNQ サイクルを視点として明らかにしたいと考えた。

2. 研究の目的

研究の目的は以下の2点である。

- ア. TNQ サイクルを活用した体育発表会と教科等を関連付けた教科等横断的な学習を行い、めざす子どもの姿を実現すること
- イ. 体育発表会と教科等を関連付けた教科等横断的な学習における ICT 機器の活用法を、TNQ サイクルを視点として明らかにすること

研究教科については、道徳科を中心に据えて、全教科・領域を対象にすることとした。

3. 研究の経過

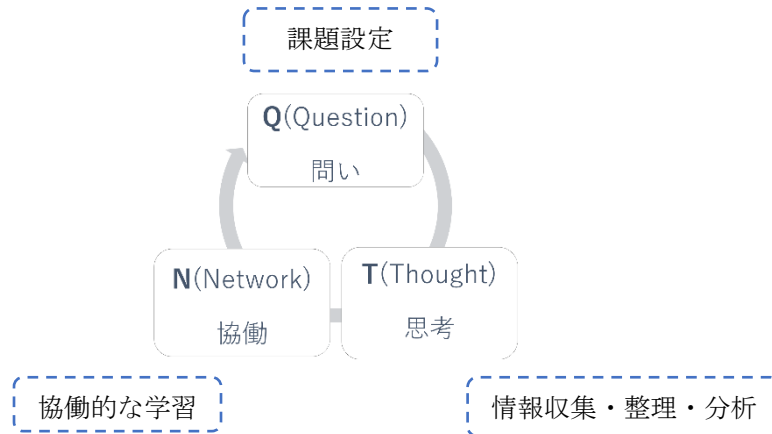
(1) TNQ サイクルの定義

TNQ サイクルは、文部科学省から提案されている探究的な学習の定義（以下、参照）のキー

ワードを参考に、本校独自で捉え直した TNQ（探究）サイクルである。

（文部科学省の探究的な学習の定義）

自ら課題設定(Question)し、解決に向けて情報収集・整理・分析(Thought)したことを表現する過程で、周囲の人と協働的(Network)に学習を進めていく学習活動³⁾



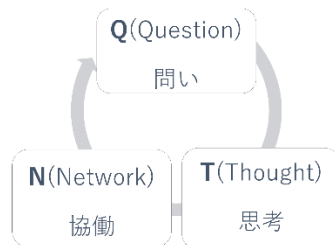
TNQ サイクル活用の留意点として以下の 2 点を教職員で共有した。

- ・ TNQ サイクルは、子どもの探究を促す手段であるため、TNQ サイクルを活用することが目的とならないようにすること。
- ・ 「TNQ」という順序で表記されているが、必ずしも探究は「T」で始まるということではなく、授業のねらいや状況に応じて順序は変化するということ。

(2) 体育発表会と教科等を関連付ける手段としての TNQ サイクルの具現化

全学年の取り組みにおいては、基本的には以下のような TNQ サイクルで学習活動を設定した。

学校行事のテーマの意味や、参観者にどのような思いを伝えたいのかという「問い」を設定する。



個の思考を基にして、学級として、テーマの意味や参観者に伝えたい思いを協働的に考えたり、協働的に表現⁴⁾を創ったりする。

学校行事に関わる取り組みを通して、個人でテーマの意味や参観者に伝えたい思いを考える。そして、他教科・領域を関連させて、表現に込めたい思いを深め、他教科の学びを表現に生かす。

4. 代表的な実践

以下、低学年と高学年の体育発表会と教科等に関連付けた実践を取り上げる。なお、TNQ サイクルの Question は(Q)、Thought は(T)、Network は(N)と表記する。

(1) TNQ サイクルを取り入れた低学年の実践概要

- ①見てくれた人たちにどんな気持ちになってほしいのかを考えた。(Q)
- ②周りの人たちの気持ちを明るくするには自分たちはどうすればいいかを考えた。(T)(N)
- ③図工の時間に Lamp を作成した。(T)
- ④自分たちの表現を、タブレットを通して振り返り、表現の工夫に活かした。(T)(N)

(2) 取り組みの具体

タブレットを使った意見交流
 集団演技を観てくれる人たちに、どんな気持ちになってもらいたいかをタブレットに記入、共有した。



図画工作科の Lamp 作り
 「見ている人が笑顔になってほしい」という思いをもった。思いを伝えるためには自分たちが楽しむことが必要であると考えた。みんなと楽しんで演技している姿を想像し、自分たちが輝く姿を「Lamp」の作成を通して表現した。

タブレットによる演技の振り返り
 タブレットで撮影した動画を観たり、その日の演技の振り返りで良かったところと練習が必要なところを考えたりすることで、自ら課題を見つけた。



(3) 子どもの変容

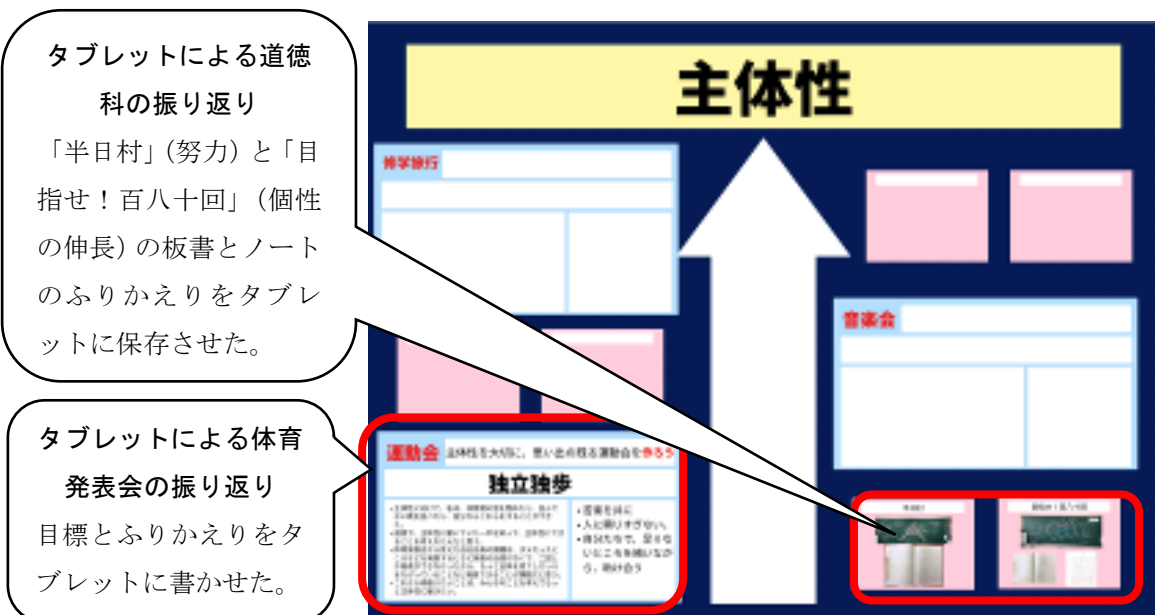
「自分たちの演技を何のために見てもらうのか」や「見てくれた人にどんな気持ちになってほしいのか」を考えた。すると、「まずは自分たちが楽しみたい」や「うまくいかなくてもいいから、思い切って、もっと頑張りたい」という姿がみられた。その結果、休み時間や放課後にダンスの見せ合いをして、アドバイスをし合う子どもの姿が見ることができた。この姿から、「うまくいかなくてもいい おもいきって やってみよう」という感情が育まれたとみた。

(1) TNQ サイクルを取り入れた高学年の実践概要

- ① 2学期の学年目標である「主体性」に向けて、体育発表会ではどんな取り組みを行うのかをタブレットを通して考える。(Q)
- ② 道徳科では曲の意味に合わせて「個性の伸長」「努力」について考えて、表現意図をもつ。(T)(N)
- ③ 表現したい思いを基に「This is Me」の曲に合わせたポーズを考えて、表現の工夫を行った。(T)(N)

(2) 取り組みの具体

「主体性」をもつために自分たちがどのように学校行事に取り組んでいくのかを明確にし、体育発表会後に成果と課題をふりかえって次につなげていくようにした。



タブレットで練習の風景を撮影
実行委員の子どもたちで「めあて」を考えたり、動画で演技を振り返ったりして、練習に取り組んだ。



体育発表会当日
「これが自分だ!」というポーズを堂々と表現した。

(3) 子どもの変容

自分たちの課題は何かについて話し合い、そこから「主体性」を大切することを目標とした。練習の初めは誰かが動くのを待って行動していた。しかし、「努力」に関する道徳科授業の後には「一人の努力」に良さを感じられるようになってきたとみた。そこから、努力を積み重ねる姿が見られ、表現したい思いを基に自らが進んで行動するようになったと推察した。この姿から「うまくいなくてもいい おもいきって やってみよう」という感情が育まれたとみた。

5. 研究の成果

本研究の目的は以下の2点であった。以下に具体的な成果を示す。

- ア. TNQ サイクルを活用した体育発表会と教科等を関連付けた教科等横断的な学習を行い、めざす子どもの姿を実現すること
- イ. 体育発表会と教科等を関連付けた教科等横断的な学習における ICT 機器の活用法を、TNQ サイクルを視点として明らかにすること

- ア. TNQ サイクルを活用した体育発表会と教科等を関連付けた教科等横断的な学習を行い、めざす子どもの姿を実現すること

表1 体育発表会に関わるアンケート結果(1~6年生対象)

設問内容	肯定度
体育発表会の団体演技では、表現したい思いや気持ちを考えた	96%
表現したい思いや気持ちが人に伝わった	95%
体育発表会の団体演技では自分たちで「表現」を創ることができた	96%

(成果)

体育発表会では表面的な表現を創ることに偏った指導ではなく、表現したい思いや気持ちを考えさせることで、子どもの内面を育てることができた。前項の低学年と高学年の姿の変容を考察すると、表現したい思いや気持ちを考えさせたことによって、表現意欲を喚起して、「うまくいなくてもいい おもきって やってみよう」という感情がもてたと推察した。

さらに、表1のアンケート結果を考察すると、子どもの内面を基に表現を創ったからこそ、自分たちで表現を創ったという感情(96%)が得られたのではないかと考える。つまり、「うまくいなくてもいい おもいきって やってみよう」という感情が全校で培われたのではないかと考える。

- イ. 体育発表会と教科等を関連付けた教科等横断的な学習における ICT 機器の活用法を、TNQ サイクルを視点として明らかにすること

(成果)

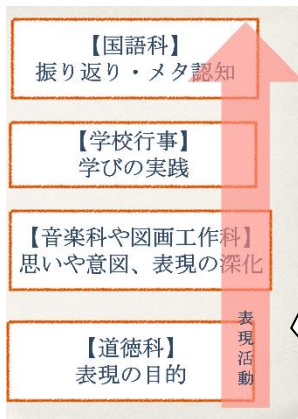
低学年と高学年の体育発表会と教科等を関連付けた教科等横断的な学習における ICT 機器の活用法は以下の3点だと考えた。

- ①体育発表会に込めたい思いや気持ちを整理して(Thought)、他者と考えを共有(Network)する活用法
- ②学校行事を通した変容を児童が自覚(Thought)するためのルーブリックとしての活用法
- ③演技を撮影した動画を基に振り返り(Thought)を行い、表現の工夫に活かす活用法

6. 今後の課題・展望

TNQ サイクルを取り入れた体育発表会と教科等を関連づけた取り組みによって、以下のようなカリキュラム・マネジメントの示唆を得ることができた。来年度は、文化的行事等、他の学校

行事にも応用可能なカリキュラムなのかを実証していきたいと考えた。



道徳科は、表現に込める思いを「言葉」として可視化する側面がある。体育発表会では、道徳科で表現意図を深めることが可能となり、子どもの表現の目的となった。

音楽科、図画工作科については、内面を「音や色彩」にするなどし、五感で感じ取れる形にしていき、内面をより具体化していく側面がある。体育発表会では、内面が育まれると、子どもたちの表現意欲がより喚起されるという姿がみられた。

国語科については、体育発表会の取り組みを「新聞」にまとめることによって、学びのメタ認知を図れた。

7. おわりに

ICT 機器は子どもたちの思考(Thought)や協働的な学び(Network)など探究を促す手段として、有効に働くということが児童の姿から実証することができたと推察する。表 2 アンケート結果によると本校の ICT 機器の活用率は高水準を保つことができている。一方で、引き続き、ICT 機器を使うことを目的とするのではなく、子どもたちの資質・能力を育成するための手段として活用することを大切にしたい実践研究を行う必要があると考えた。

表 2 ICT 機器の使用に関わるアンケート結果（1～6 年生対象）

設問内容	肯定度
一人一台端末を活用した授業を毎日一回以上受けていた	84%
授業では ICT を使って情報を収集したり、整理したり発表するためのスライドや資料を作成したりする場面があった	95%

8. 引用・参考文献

- 1) 「すくすくウォッチ」とは、大阪府の公立小学校 5・6 年生を対象に読解力や情報活用能力の向上を目的にした独自の新しい学力調査である。学校や日常生活についてのアンケートも実施される。
- 2) 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領解説 特別活動編』東洋館出版社, p.129
- 3) 文部科学省「17 第 1 編—第 2 章今、求められる力を高めるための学習指導第 2 章第 2 章今、求められる力を高めるための学習指導第 1 節学習指導の基本的な考え方」
[https://www.mext.go.jp/result_js.htm?q=%E6%8E%A2%E7%A9%B6%E7%9A%84%E3%81%AA%E5%AD%A6%E7%BF%92%E3%81%A8%E3%81%AF&search=x#resultstop\(2022年2月閲覧\)](https://www.mext.go.jp/result_js.htm?q=%E6%8E%A2%E7%A9%B6%E7%9A%84%E3%81%AA%E5%AD%A6%E7%BF%92%E3%81%A8%E3%81%AF&search=x#resultstop(2022年2月閲覧))
- 4) 本校における表現の定義は、子どもの内面を外に表す行為と規定している。小島律子(2017)「表現の原理」日本学校音楽教育実践学会編『音楽教育実践学事典』音楽之友社, p. 32